

ロープシンの影 —— 日本における『蒼ざめた馬』受容の一側面 ——

田村 太

0. はじめに

いわゆる「ナロードニキ」に代表される帝政期ロシアの革命思想・運動が世界的な反響を呼び、パンフレットや檄文などが様々な言語の翻訳を通して受容された事はよく知られている。近年に公表された研究も明らかにしているように、テロ戦略を採用した「人民の意志」派の組織や綱領が模範となったり、¹ ナロードニキの革命家が自由の闘士として英雄視されたり、² あるいは社会革命党(以下、エスエルと表記)の戦闘団による暗殺が第一次ロシア革命のインパクトと共に欧米諸国で多くの関心を集めたりした。³ もちろん日本も例外ではなく、ロシア帝国内で発生していた一連の暗殺事件への関心の高まりから、明治初期にナロードニキに関する文献が⁴「虚無党」と題されて数多く翻案されている。⁴ こういったナロードニキの世界的受容の内実はまだ未解明な部分が多く、更に研究を重ねる必要がある事は言を俟たない。そこで本論文では、ロープシンの筆名で知られている 20 世紀初頭の革命家／作家ボリス・サヴィンコフ(Борис Викторович Савинков, 1879-1925)⁵ の中編小説『蒼ざめた馬』(Конь бледный, 1909)の日本における受容の一側面を明らかにしてみたいと思う。

この狙いの背景には 2 つの志向がある。その一つは、19 世紀末から 20 世紀初頭ロシアの革命家の自伝や回想録を「革命運動史」という枠組みから距離を置いた上で、自己語りの言説として読み直してみたいという志向である。従来であるならば、革命を善として反革命を悪とする価値判断に基づいて、一連の革命家の自己語りは「革命運動史」を構成する歴史的資料として主に扱われてきた。⁶ これに対して、「使い古され

¹ Будничкай О.В. Терроризм в российском освободительном движении: идеология, этика, психология (вторая половина XIX - начало XX в.). М.: Политическая энциклопедия, 2016. С. 15.

² Steven G. Marks. *How Russia Shaped the Modern World*. Princeton & Oxford: Princeton University Press, 2003, p. 20.

³ Lara Green. *Russian Revolutionary Terrorism in Transnational Perspective: Representations and Networks, 1881-1926*. Doctoral Thesis, United Kingdom, Newcastle: University of Northumbria, 2019, p. 12.

⁴ 鹿島亘『ロシア文学翻訳者列伝』東洋書店、2012 年、5 頁、60-63 頁参照。

⁵ 1879 年にハリコフで生まれる。幼年期をワルシャワで過ごしたのちペテルブルグ大学へ入学。その後いくつかの大学を転々とする過程で革命運動に参加して 1903 年にエスエルのメンバーとなり同組織の戦闘団の副リーダーを務める。1904 年のブレーヴェ内相暗殺、1905 年のセルゲイ大公暗殺を指揮。亡命先のフランスにて 1909 年からロープシン名義で作家活動を行い、自身の体験に基づいた中編『蒼ざめた馬』や長編『無かったこと』(То, чего не было, 1912-1913)をロシアで発表して物議を醸す。二月革命の報を受けて 1917 年に帰国、臨時政府の閣僚間を取り持つフィクサーとして活動。十月革命後は反ボリシェヴィキ運動に転じて各地方の白軍等を指揮。1924 年にソ連当局により逮捕され翌年ルビャンカ監獄にて変死。他作品に回想記『テロリストの回想』(Воспоминания террориста, 1907-1916)や中編『漆黒の馬』(Конь вороной, 1924)など。

⁶ 例えば、ソ連期の或る文学史は「ロープシン(サヴィンコフ)の小説において[……]エスエルの実践活動への幻滅がヒステリックで悲劇的なほどばしりのなかで描写されている」と述べているように、サヴィンコフ作品とエスエルを同一のカテゴリーを指すものとして位置付けている。История русской литературы. Т. 4. Литература конца XIX - начала XX века. Л.: Наука, 1983. С. 5-8.

た革命と反革命の図式」⁷ から距離を置いた上で、例えば「ナロードニキ作家」と呼ばれてきた作家の作品の内実を検討する試みが近年においてなされている。革命家の自伝や回想録を再考するに際して、このようなアプローチは有益なものであらうと思われる。そしていまひとつは、前述したようなナロードニキの世界的受容の一端を探る事である。本論においても詳しく触れるように、ナロードニキの革命家による自己語り⁸が近代日本の知識人に与えた精神的影響は極めて深刻なものである。それゆえ、当の知識人の自己語りに即して、その受容の内実を検討する事は今日においても重要性を失っていないであらう。

本論文はそうした志向に沿ってロープシン『蒼ざめた馬』の受容を探ろうとする一つの拙い試論である。次のような構成で本論文は進む。まず第 1 章で日本におけるナロードニキ受容の大まかな特徴を素描した後、次いで第 2 章でロープシン『蒼ざめた馬』受容の特異性を見ていく。全体的な特徴をそれぞれ確認した後、考察対象を第 3 章から文芸批評家の平野謙(1907-1978)の批評に絞り込み、この批評家が戦前・戦後にわたって『蒼ざめた馬』に向き合い続けた稀有な知識人である事を指摘したい。

1. 日本におけるナロードニキの受容・一つの素描

そもそも近代日本においてナロードニキはいかなる言説として機能したのであろうか。ロープシン『蒼ざめた馬』の受容の位置を測定するためには、私達はナロードニキに対して示された共通の受容態度についての差し当たりの概略図を描く必要がある。

言うまでもない事だが、近代日本の知識人にとって、個人テロを重視したナロードニキは組織的な運動を重視したマルクス主義とは決定的に異なっていた。従って、明治初期から 1960-70 年代に至るまで、ナロードニキに関する言説は政治綱領や戦略としてではなく、むしろ読者の諸次元のパトス(同情や共感)を集約させるものとして主に機能したのではないと思われる。実際に、ナロードニキやアナキズムの実践とその歴史を概括的に扱った学術書『近世無政府主義』(1902)を明治期の社会主義者の多くが熟読し、「ロシアの状況に絶望し、立ち上がっていく虚無党の情念というものに共感」⁸ したという。更に 1917 年以降になると、ナロードニキやエスエルはボリシェヴィキとの権力闘争に敗北した思想／運動の一つとして、⁹ すなわちテロ戦略に傾いた「敗北者」として位置付けられる事となり、これが一段とパトスを集約させる性格を強めたのではないかと考えられる。例えば社会主義者の荒畑寒村(1887-1981)によって上梓されたナロードニキに関する幾つかの通史はそうした性格を十分に示している。彼の『ロシア革命運動の曙』(1960)や『ロシア革命前史』(1967)といった書籍の表題が既に示す通り、ナロードニキの実践はボリシェヴィキによる十月革命を準

⁷ 大山麻稀子「森の正義」と「神の正義」—— G・ウスペンスキーの大地とナロードニキ思想の理念 ——, 『ロシア思想史研究』、日本ロシア思想史学会、3 号、2006 年、235 頁。

⁸ 梅森直之「社会問題の顕在化と早稲田大学」、『プロジェクト研究』、早稲田大学総合研究機構、3 号、2007 年、80 頁。

⁹ 作家の平林たい子が回想しているように、「ロシア社会革命党の略号「エス・エル」の思想はすでに評価済みの非マルクスの革命思想として、昭和初年の学生たちには、鼻であしらわれていた。平林たい子「ロープシンの小説」、『自由』、自由社、10 巻 3 月号、1968 年、27 頁。

備したと認識されており(「曙」・「前史」)、まさにそのように前提とする事によって「敗北者」への共感が高らかに表明されている。『ロシア革命運動の曙』のはしがきで述べられているように、荒畑はナロードニキが「明白な社会改革の綱領をもたず、人道主義と正義感だけで行動したロマンチスト」であり「小ブルジョアジーの封建制に対する不満の反映」¹⁰ であると否定的に評しながら、それ故に「だが」と挿入してパトス的な評価へと切り替えるのである。

だが、それはみな後に習得した知識に過ぎないので、当時の私の実感ではなかった。私はただ、数千の青年男女が王政と搾取に喘ぐ人民を救い、無知と窮乏から彼等を解放しようとする理想に情熱を傾け、あるいは現在の幸福な生活を捨て、あるいは将来の社会的栄達を抛ち、人民(主として農民)のうちに身を投じて啓蒙運動を開始した、その犠牲と献身の精神に感動したのである。ことに平和な啓蒙主義の「ヴ・ナロード」運動が、専制政府の苛烈な迫害に反撥してテロリスト化した過程を知るに及んでは、為政者の暗愚と暴虐、犠牲者の殉難と刻苦とに悲憤痛恨を禁じ得なかった。¹¹ [強調は田村]

上記の引用文のように、ナロードニキについて語られる際に「感動」や「悲憤痛恨」といった感情を示す様々な語が頻出する事は珍しい事ではない。もちろん、このようなパトスに比重の置かれた受容態度は日本におけるナロードニキ受容史では氷山の一角に過ぎないとはいえ、ここでは戦前・戦後にわたってナロードニキが同時代の知識人の心情に呼応してくれる言説として機能し得た事をまず確認しておきたい。

2. 『蒼ざめた馬』の受容

前章で私達は戦前・戦後においてナロードニキが様々な次元のパトスを集約させる言説として機能していた事を確認したが、サヴィンコフ／ロープシンもまたそういった言説の厚みの中にある。但し、彼の占めている場が他の幾多の革命家と非常に異なる事には注意せねばならない。ここでは前章の内容を踏まえながら、ロープシン『蒼ざめた馬』の受容の特徴について論を進めよう。

そもそもロープシンの筆名を持つサヴィンコフは帝政期ロシアの突出した革命家の一人であると言っても、まだ物足りないと思わせるほど未解明な拡がりを持った人物である。¹² 幾多の革命家と彼を分かť決定的な点をひとつ挙げるとすれば、その熾烈な体験を文学的素材として創作を試み、象徴派の詩人や作家から高く評価された作家ロープシンであった事、これである。「総督」と呼ばれている市長の暗殺を狙う集団の活

¹⁰ 荒畑寒村『ロシア革命運動の曙』岩波新書、1960年、vi頁。

¹¹ 同上、vi頁。

¹² 近代ロシア政治史家のモロゾーフは2016年の論文において次のようにサヴィンコフの特徴を3つに整理している。第一に彼の幾多の才能。第二に行為や性格そして社会・政治に関する考えなど、あらゆる点において露呈した稀有なアンビバレンツ。第三に彼の気質と矛盾とが絡み合いつつ自らの行為の否定に及ぶその異端性。これらの点でサヴィンコフはただでさえ突出した個我の持主の多いロシアの革命運動の領域において特に際立っているとモロゾーフは指摘している。Морозов К.Н. Феномен Бориса Савинкова и загадка его гибели // Идентификация и идеалы. 2016. № 3(29). С. 157.

動を主人公ジョージの語りによって描いた中編小説『蒼ざめた馬』が、世界各地で話題を獲得して彼の名を有名にした事実も、他の革命家と一線を劃する点であろう。

さて、サヴィンコフ／ロープシンの特異な人物像を考慮に入れつつ、日本における『蒼ざめた馬』受容の特徴について触れるとすれば、この中編小説が戦前・戦後の日本においてブームと呼び得る現象を二度も引き起こした点に何よりもまず注意する必要がある。すなわち、一度目は大正時代末から昭和初年にかけて、二度目は1960年代末から1970年代中頃にかけて、この小説は各時代の読者に熱烈に歓迎されているのである。¹³ 戦前・戦後を通して多くの翻訳者を惹き付けて、幾度も様々な版から翻訳され、そのたびに熱狂的なブームを引き起こしたテキストは、日本におけるナロードニキ受容史を概観すると、ロープシン『蒼ざめた馬』を描いて他に無いと思われる。

それでは『蒼ざめた馬』という小説はブームの只中においてどのような言説として機能し得たのであろうか。時代状況や読者の立場などの様々な差異を認めつつ、その一特徴を抽出するとしたら、『蒼ざめた馬』はパトス集約型の言説としてだけでなく同時代の政治的暴力を考察するための思想／言説としても機能し得たのではないと思われる。つまり、「テロリストの情念」¹⁴ を通して、読者の多くが同時代の政治的暴力における倫理的な諸問題を抽出しようとしたのである。もっとも、このような受容態度は日本に限った事ではない。1909年に『蒼ざめた馬』が発表されて以来、同時代の政治状況との関連において、その作品と作者から思想性・哲学性を抽出する事はロープシン受容において共通の姿勢であったからだ。例えば、後にチェコの初代大統領となる哲学者のトマーシュ・マサリク(1850-1937)は、第一次ロシア革命期に執筆した自著において『蒼ざめた馬』をエスエル関係者による「革命主義に対する批判」¹⁵ の書として位置付け、「芸術家と作家としてのロープシンについて、多くを語るつもりはないが、哲学的内容は非常に私の関心を惹きつける」¹⁶ と

¹³ 『蒼ざめた馬』は文芸批評家の青野季吉によって1919年に英訳版から翻訳された(なお、この版は1924年に随筆社から刊行されているが内容に異同は無い)。次に戦前のロシア文学者の長岡義夫による露語原著からの翻訳も存在するが、『蒼ざめた馬』(世界名作文庫 第328)春陽堂、1932年)、戦前で広範な評判を得たのは青野訳である。戦後に移ると、1951年に再び英訳版からの翻訳(猪野満智子訳『蒼ざめた馬』世紀書房)、次いで1967年に2名のロシア文学研究者による原著からの翻訳がなされており、後者は二度目のロープシン・ブームの発端となった(川崎淑訳『蒼ざめた馬』附ロープシン詩抄『現代思潮社』工藤正廣訳『蒼ざめた馬』(晶文選書4)晶文社)。ところで各翻訳者の底本とした版がそれぞれ異なっている事に注意されたい。というものは『蒼ざめた馬』には2つの異本が存在しており、第三者によって改変された雑誌掲載版(Ропшин В. Конь бледный // Журнал «Русская мысль», 1909, № 1.)と完全版の単行本版(Ропшин В. Конь бледный. Ницца. 1913.)が存在する。前者を底本とした英語訳(Ropshin V. *The Pale Horse*. Translated by Zinaida Vengerova. Maunsell and Co. Ltd. In London and Dublin. 1917; Ropshin. *The Pale Horse*. Translated by Zinaida Vengerova. Published by A.A. Knopf in N.Y. 1919.)から青野と猪野は翻訳し、後者の版から長岡と川崎と工藤は翻訳している。『蒼ざめた馬』やその他のロープシン作品の翻訳史については、グリーン博士論文が詳しい。Green, *Russian Revolutionary Terrorism in Transnational Perspective*, pp. 207-221. また、1967年の現代思潮社から刊行された『蒼ざめた馬』について、当時その社員であった陶山幾朗が興味深い逸話を提示している。陶山幾朗「現代思潮社」という閃光：記憶を辿る旅(2)、『アーリーナ』、中部大学国際人間学研究所、15号、2013年、136-139頁。

¹⁴ 川崎淑「近代テロリストの不条理」、『現代思想』10月号、1973年、33頁。

¹⁵ T.G. マサリク/石川達夫、長興進訳『ロシアとヨーロッパ——ロシアにおける精神戦術の研究——』2巻、成文社、2004年、370頁。

¹⁶ 同上、377頁。

述べている。これが日本の場合、『蒼ざめた馬』を「おれたちの教科書」¹⁷として読んだ大正期のテロリスト達、¹⁸そして山村工作隊に代表される武装闘争路線が全国各地で盛り上がった1951年に英訳版『蒼ざめた馬』を翻訳した際、眼前の出来事と小説がテロリズムという歴史的難問に貫かれていていると見えた翻訳者、¹⁹あるいは「三派系全学連」の暴力を評した際、ロープシンの小説に言及しながら「彼の書いている作品が、実際に合うかどうか知りませんが、量の問題ではなくて、やはり革命というのは無血ではすまないものであって、実にむだに人が死んだだろうと思います」²⁰と述べて現代の政治暴力の思想的淵源を垣間見る高橋和巳(1931-1971)——彼らの言葉の端々にそうした受容の相を認める事が出来るであろう。もちろん、これは『蒼ざめた馬』を受容した人々から目につきやすい特徴を粗く素描したに過ぎないが、ロープシンの小説が同時代の政治的暴力を考察するための思想／言説として機能した事は、まず間違いのないようだ。²¹

以上、私達は日本におけるナロードニキ受容からロープシン『蒼ざめた馬』受容までに見られる諸特徴を大雑把にまとめたが、それらがいずれも或る特定の時期に熱狂的な流行現象を形成した後、急速に読者の関心が衰えている事は興味深い。その理由をブームが同時代の政治状況と密接に連動していたから、と言ってしまうのは余りにも表皮的な見方である。とはいえ、ロープシン・ブームが1920-30年代の関東大震災後のテロ事件や日本共産党への弾圧や転向、そして1960-70年代の大学紛争といったように、戦前・戦後の政治状況と歩みを合わせていた事は否定し難いのである。

問題は、このような受容を指して、ナロードニキや『蒼ざめた馬』が日本において利根的な興奮と感動しか引き起こさず、マルクス主義のような精神的出会いとして知識人に受け止められなかったとする説である。

¹⁷ 江口渕『続・わが文学半生記』青木文庫、1968年、92頁。

¹⁸ ここで言う大正期のテロリストとは「ギロチン社」と自称した一団によるテロリズム(1924年9月)に関与した青年達を念頭に置いている。

¹⁹ 訳者の猪野満智子は「訳者解説」で次のように述べている。「訳者の主観的見解はテロリズムを否定するが、「テロリズムは、或る特定の歴史的時期に、或る特殊の政治斗争状態の下に生れたものである」というテロリズムの客観的な、歴史的現実を、否定し得ないことを悲しむものである。[……]訳者が、この『蒼ざめた馬』を訳した根拠は、この心の矛盾を、世の識者(特に為政者)に訴え、革命的暴力という、一七八九年のフランス大革命以来の人類に課せられた最も大きな問題を解決したいからである」。猪野満智子「訳者解説」、ロープシン／猪野満智子訳『蒼ざめた馬』世紀書房、1951年、226頁。

²⁰ いいだ・もも、高橋和巳、竹内芳郎、鶴見俊輔「座談会」暴力考、『文藝』、河出書房新社、7巻6号、1968年、243頁。

²¹ このような受容の特異性は、例えば19世紀ロシアの批評家、作家のニコライ・チェルヌイシェフスキー(1828-89)の長編『何をなすべきか』(1863)の受容と比較する事によって、一層明らかになるかもしれない。戦前・戦後にわたって『何をなすべきか』は、レーニンの愛読書として特権的な地位を占めると同時に、「個人の利益と社会の利益とを一致させる道徳的原則、作者の説く『理性的エゴイズム』にもとづいて生活する『新しい人々』」を描き出した「社会主義的空想小説」として受容された(金子幸彦『チェルヌイシェフスキー』、『一橋論叢』45巻4号、1961年、342-343頁)。作者に対しても「ロシア社会主義運動の『父』」として(神近市子「譯者序」、チェルヌイシェフスキー／神近市子訳『何をなすべきか』上、南北書院、1931年、1頁)、あるいは「ロシアにおけるマルクス主義以前の最大の思想家」として肯定的な評価が付与された(石山正三『チェルヌイシェフスキーとその『現実』に対する芸術的美学的関係』について)、チェルヌイシェフスキー／石山正三訳『現実に対する芸術的美学的関係(世界古典文庫・37巻)』日本評論社、1948年、237頁)。これに対して、レーニンの政敵であり、反ボリシェヴィキであったサヴィンコフ／ロープシンの場合、チェルヌイシェフスキーの価値観の対立物として受容されたと見る事が出来る。ロシア文学者の川崎淡の整理が示すように、「サヴィンコフ自身の中に、最も効率のよい殺人方法を追求する合理的なテロリスト＝革命家と同時に、愛のない合理的なだけの社会、いわゆるドストエフスキーの『水晶宮』建設をめざす社会主義を拒否する反合理的の精神が同居している」からである(川崎『近代テロリストの不条理』、33頁)。こういった整理から、チェルヌイシェフスキー受容には見出されないような、政治的暴力を考察するための思想／言説として受容する態度を掘み出す事が出来るであろう。

例えば、ロシア史家の和田春樹は荒畑の『ロシア革命運動の曙』を書評した際、日本におけるナロードニキ受容を非革命家型と革命家型に切り分けた上で、両者がナロードニキという異質な他者を無反省に自己へと接続した結果、受容者の多くが一時的な感動に終始するか、或いは政治闘争の技術的側面を単に吸収するか、のいずれかであったと主張した。²² たしかにそのような一面は否定出来ないが、「感動して、さっぱりする、そして、これまでの生き方はそのまま」²³ という受容に尽きるとは考えにくい。言うまでもなく、人は静止した物体ではなく、常に変わり得るものである。或るテキストとの出会いが、かつて一介の感動で終わったように見えるとしても、生の途上で様々な体験を経ていく中で、いま一度その文字を辿っていく時、読みの過程で伝わってくる感触がかつての読みとは異なっている事自体、少しも奇異な事ではない。そして或る時代状況において再読する途上で、当のテキストと自己との出会いを記述し、かつての「感動」の意味を再考するとしたら、それは単なる感動で終わる筈が無いだろう。「感動」を再考して或るテキストと自己との出会いの意味を問い掛けた知識人の言説に即して、『蒼ざめた馬』の受容の軌道を再現してみる必要がある。

そこで次章から考察対象として扱うのは文芸批評家の平野謙の批評である。一見すると、ロープシンと平野謙には全く接点が無いように思われるかもしれない。なるほど、本論文の問題設定に沿えば、大正期のアナキズム系のテロリストを中心に考察の方が適切であろう。大杉栄の仇討と称して暗殺と破壊に走ったテロリストの青年が『蒼ざめた馬』を愛読して多大な影響を受けていた事については、研究者もつとに強調する所であるからだ。²⁴ しかしながら、私達が見るに、平野謙は戦前・戦後を通してロープシンに向き合い続けた知識人である。後で詳しく論じるように、彼は戦前に『蒼ざめた馬』を愛読し、そして戦後にロシアの革命運動におけるテロリズムやスパイの諸問題に触れる際にロープシンに言及し続けている。これは実に稀有な事だ。前述した通り、『蒼ざめた馬』の受容は概して一時的な熱狂に終始したために、ロープシンとの出会いの意味を自分なりに様々な文脈上で思考し続けた知識人は多くないからである。ロープシンのみならず

²² 和田春樹「日本人はナロードニキをいかにかみかたか —— 荒畑寒村「ロシア革命運動の曙」を読んで ——」、『ロシア史研究』、ロシア史研究会、1巻1号、1960年、28-32頁。

²³ 同上、29頁。ところで、和田は同書評において、保守派の政治学者として知られた猪木正道がナロードニキ革命家のヴェーラ・フィグネルの回想記を読み、革命家の道を放棄したというエピソードを紹介し、これを一時的な感動に終わった受容のタイプとして位置付けている(同上、29-30頁)。このエピソードはどうやら人口に膾炙したものらしく、例えば批評家の浅羽通明も「女性革命家の極端なまでにひたむきな自己犠牲の精神、非凡な精神力に打たれた猪木少年は、自らはともこうした生き方はできない」と見定め、革命家を志す道は選ばなかった(『アナキズム』ちくま新書、2004年、152頁)とまとめている。しかしながら、これは猪木自身の言葉に即すると不正確なものである。猪木が荒畑寒村『ロシア革命運動の曙』を書評した際、彼はフィグネルの回想記を読んだ後、「革命を語るのはやさしく、行なうことがいかにむずかしいかを知った私は、それ以来歴史上の出来事を軽々しく批評できないようになった」と述べているに過ぎないからだ(猪木正道「ナロードニキの闘魂に感銘 —— 荒畑寒村・著「ロシア革命運動の曙」 ——」、『東京新聞』1960年8月3日夕刊)。また、別のエッセーにおいても猪木は不屈の革命家としてのフィグネルに感心し、「いったいどのような思想が、こういう革命家を生んだのか」と思いを巡らせているに留まる(猪木正道、勝田吉太郎「アナキズム思想とその現代的意義」、『ブルードン・バクーニン・クロボトキン(世界の名著・42巻)』中央公論社、1967年、8頁)。いずれも革命家への道を断念したという猪木の転向表明ではないという事に注意されたい。

²⁴ 藤井貴志「江口漢「続わが文学半生記」の余白に —— G・ソレル「暴力論」にロープシン「蒼ざめた馬」 ——」、『日本文学』、日本文学協会、54巻1号、2005年、48-60頁。河原地英武「大正期のテロリズム —— ロシア思想の影響 ——」、『京都産業大学世界・問題研究所紀要』35号、2020年、167-177頁。

ナロードニキの受容を考えるにあたって、平野の批評を扱う理由はまさにここに存している。それでは、どうして平野は一時的な「感動」に終わる事無く、その後もロープシンと向き合い続けたのであろうか。次章から私達はこの点について重点的に問い掛ける事にしよう。

3. 平野謙のロープシン観

私達が見るに、海外の作家について論じている平野の批評は極めて少ない。もちろん例外はあり、1939年に小林秀雄の『ドストエフスキイの生活』の刊行を契機として、平野は一時期ドストエフスキイの作品を読む事に没頭している。1940年に東大美学科の卒論として「ドストエフスキイ論」を提出した後、²⁵ 翌年に『「虐げられし人びと」覚え書』を執筆しているように、この時期におけるドストエフスキイへの平野の取り組みを無視するわけにはいかない。しかし『「虐げられし人びと」覚え書』が未完で終わっている事や、その後ドストエフスキイについて平野が殆ど批評しなかった事²⁶を考慮すれば、彼の批評活動の本領はあくまで近代日本文学にあったと見做す方がやはり精確である。それ故にロープシンに対する平野の絶えざる関心が注目に値するのである。以下本章において私達は次の平野の4つの批評を分析していく。すなわち「組織のなかの人間」(1956年8月)、「日本のテロリスト」(1958年7月)、『「蒼ざめた馬」と私』(1967年11月)、さらにロープシンを直接的に扱ったものではないが「文学運動の流れのなかから」(1969年3月)も考察対象に加える。これらの批評を年代順に追跡する事によって、彼のロープシン観の変遷を仔細に明らかにしたいと思う。

3-1. 組織と人間

『蒼ざめた馬』について平野が詳しく言及したのは1968年刊行の晶文社版『蒼ざめた馬』の解説においてだが、1950年代の批評においても時折言及される対象であった。「組織のなかの人間」と「日本のテロリスト」がそれぞれである。私達なりにまとめると、これらの批評における主眼は日本の左翼運動における組織に対する批判であり、その際に準拠すべき参照先として引き出されたのが帝政期ロシアの革命組織だった。この文脈において『蒼ざめた馬』は言及されている。

まず「組織のなかの人間」を見てみよう。おそらく平野が初めてロシアの革命家や革命組織について具体的に言及したこの短い批評の論旨を要言すれば、一個人の力を超越した組織の魔術的な力を現代日本の作家は描写出来ていないという事に絞られるだろう。この主張自体は同時代の知的傾向を色濃く反映している。日本共産党の路線転換やスターリン批判などの引き起こした思想的混乱が多くの左翼的知識人を直撃し

²⁵ 中山和子『平野謙と「戦後」批評(中山和子コレクションIII)』翰林書房、2005年、436頁参照。

²⁶ 『平野謙全集』1巻の「後記」によれば、平野は『「虐げられし人びと」覚え書』の後「『罪と罰』と『悪霊』について論じる予定であったが、「そのトバロのトバロで、挫折してしまった」と言う(平野謙「後記」、『平野謙全集』1巻、新潮社、1975年、479頁)。中山和子はこの時期のドストエフスキイに対する平野の関心の背景にはいわゆる「リンチ共産党事件」があると見做している(中山「平野謙と「戦後」批評」、436頁)。そうであるならば、平野は『悪霊』について批評してもおかしくないと思われるが、晩年の批評「文学作品に反映したスパイリンチ事件」(1976年4月・6月)においても、結局ドストエフスキイ作品を扱う事は無かった。なお『「虐げられし人びと」覚え書』は『平野謙全集』1巻に納められるまで単行本未収録の批評の一つである。

た1950年代中頃に、個人よりも組織の力学を問題視する知的傾向は同時代の知識人に広く共有されていたからである。次のような平野の記述もそうした同時代の傾向と無関係ではない。

しかし、フルシチョフの秘密演説によって氷山の一角をあばかれた「血の粛清」問題は、組織体であるがゆえの必然悪という絶望的な認識を、私どもにふかめた。すくなくとも、私はスターリンという独裁者の存在によってかすかすの粛清事件がもたらされた、とは信じがたい。個人指導を集団指導にきりかえたら、組織体の生む必然悪も払拭されるにいたるだろう、などとは、容易に信じられないのである。²⁷

平野はこう述べた後、問題は組織体の力学をいかに深層のレベルにおいて認識するかという課題を提示しているが、彼の見る所によれば同時代の作家達はいずれも「党員の人間のオロカサの問題」²⁸の圏内に留まっており、この力を巧く表現出来ていない。唯一の例外として平野が特権的な地位を付与しているのは作家の大佛次郎(1897-1973)の『詩人』(1933)と『地霊』(1946)という2つの小説である。²⁹とりわけ、エスエルに潜入した官憲のスパイであるエヴノ・アゼフ³⁰が同組織の戦闘団のリーダーを演じ、政治的暗殺を指導する運命を小説化した『地霊』に対して、平野は高い評価を与えている。

テロリストの秘密組織とオフラアナの秘密組織とにまたがって、双方の組織にまたがるいわば物理的必然によって、アゼフというその主人公がどちらからも無くてはかなわぬ人物にまでせりあがってゆく過程は、組織そのもののデモニッシュな力をよく示している。³¹

組織体同士の熾烈な駆け引きの間で引き裂かれるアゼフの姿に「組織のなかの人間」の極限的な運命³²を見出す平野は、しかし「このような残忍な組織体の力は日本ではまだ発現されていないか」³³と問うている。こうして平野の問題意識は日本の左翼運動における組織それ自体への批判的検討に向かうのだが、ここで確認しておきたい点は、大佛の創作のプリズム越しに、帝政期ロシアの革命組織の力学を参照する事によ

²⁷ 平野「組織のなかの人間」、『政治と文学の間』未來社、1956年、97頁。

²⁸ 同上、97頁。

²⁹ 本論文で詳しく触れる事は出来ないが、大佛もまたサヴィンコフ／ロープシンの作品に魅せられた一人である。戦前ロープシンの作品を読んで「共感が目醒めた」大佛は「テロリスト達の献身的行動の純粋さにも惹附けられた」一方で、「アゼフのような怪物が人間の中から「出る」のを知って驚きの目を瞠った」と後年回想している。大佛次郎「あとがき」、『大佛次郎ノンフィクション全集』2巻、朝日新聞社、1972年、401頁。

³⁰ アゼフ(Евно Фишелевич Азеф, 1869-1918)は、エスエル党の中央委員と同党の戦闘団のリーダーを兼任した革命家。1908年11月に官憲のスパイであった事が判明、国内外におけるエスエル党の勢力衰退の一因を成した。アレクセイ・トルストイの戯曲『アゼフ——表か裏か——』(1926)やロマン・グーリの長編『戦闘団の將軍』(1929、のち1959年『アゼフ』と改題・改作)など、彼の伝記的事実に着想を得た文学作品は多い。

³¹ 平野「組織のなかの人間」、98頁。

³² 同上、98頁。

³³ 同上、99頁。

って日本の左翼運動における組織の脆弱性が照射されている事である。このようなアプローチは大正期のテロリスト達の運動を批判した「日本のテロリスト」において一段と冴える。江口渙(1887-1975)の回想記『続・わが文学半生記』(1958)における大正期のテロリストの活動に対して、平野は大佛の作品と併読する事によって「革命運動の戯画」を見出している。

以前、私は大佛次郎の『地霊』にふれた文章を書いたことがあるが、今度改めて『地霊』『詩人』『正義の人々』などを江口渙の『続・わが文学半生記』とよみくらべてみて、日本とロシアとのテロリズムのちがいについて感を新たにした。日本のテロリズムを革命運動の戯画とか稚気マンマンとかを感じたのも、主としてそこから来た私の感想にほかならない。³⁴

平野によれば、ロシアでは革命組織と官憲との駆け引きが一個人の力を超えた組織のメカニズムを駆動させて、そこから「組織のなかの人間」が背負う運命を垣間見せるのに対し、日本の革命運動は「職業革命家の鉄の組織形態」を我が物にする事が出来ないまま、今日に至るまで「夜郎自大的ともいべきヒロイズム」と「情緒的メンタリティ」を継承しているという。³⁵ 平野はそのような特徴を『続・わが文学半生記』において、テロリストの一人が江口渙の自宅を訪問した際、庭の花壇を眺めながら「ああ、きれいだな。じつにきれいだ」と言う場面を見出している。

死を覚悟した末期の眼にうつる自然の美しさを詠嘆するそのつぶやきをきいて、江口渙は「これが日本のテロリストの姿なのか」と考え、思わずその孤独なすがたをロシアのテロリストのねばりづよいたたかいぶりとくらべてみる。この場面の江口の描写はまことに印象あざやかである。そして、私どもも江口とともに、「これが日本の思想の本源なのか」とつぶやきたくなる。³⁶

恐らく、それ故に現代日本の作家達は組織体の力を創作の域にまで表現出来ていないという指摘が平野の批評においてなされるのだろう。もちろん、このようなアプローチについて、西欧諸国を基準にした日本の革命運動欠陥論に過ぎないと言うのは容易である。日本の革命運動を「戯画」と言う時、平野がロシアの場合に戯画ではない真正を前提している事に気付くのは、そう難しい事ではない。だがここで私達が注目したいのは、このような文脈において平野が「情緒的メンタリティ」を代表する一テキストとして『蒼ざめた馬』を位置づけている事である。「日本のテロリスト」において特に強調されているわけではないが、『蒼ざめた馬』は「いわばテロリズムの叙事的散文詩」と言うべき作品であり、大正期のテロリスト達の「革命的情熱の源泉

³⁴ 平野「日本のテロリスト」、『群像』13 巻 7 月号、1958 年、151 頁。

³⁵ 同上、153 頁。

³⁶ 同上、151 頁。

泉をなすほどの影響を与えている」³⁷と書かれている。こういったテキストを「共有財産」としていた彼らの結び付きは「最初から思想的媒介ぬきのもの」であり、組織論も綱領も有してはいなかった。あくまで「幸徳秋水や菅野すが子の伝説、『蒼ざめた馬』の壮烈なロマンティズムというような情緒的なもの」が彼らの語りの内に見出されるばかりだ。たしかに獄中で書かれた彼らの回想記や詩歌は私達の心を打つ。「しかし、それは破壊型の私小説家の作品に私どもが感動するのとはほぼ同質のものに過ぎない。そこに思想はなく、そこに倫理はない」³⁸。

ここまで見れば、平野の批評において『蒼ざめた馬』は否定的な地位に置かれているように見えるけれども、ロープシンに対する彼の態度はそう明快なものではない。私達は次に 1960 年代後半に執筆された平野の批評を見ていくが、日本の左翼運動における「情緒的なもの」の中に『蒼ざめた馬』を位置づける彼のロープシン観は、二度目のロープシン・ブームを迎えた時の彼の立場を考える上で重要なものとなる。

3-2. 末期の眼

1967 年 11 月 30 日に晶文社から『蒼ざめた馬』の初版が刊行された際、平野は同書に『「蒼ざめた馬」と私』と題する解説を寄せている。これは『蒼ざめた馬』の内容解説と言うより青野季吉評『蒼ざめたる馬』についての回想的なエッセーと言った方が正しい。僅か 5 頁程の短い解説文であるとはいえ、平野が具体的にどのように『蒼ざめた馬』を読んだのかを自ら回想している点で注目し値する。まず彼は「大正時代に流通していた青野季吉評『蒼ざめたる馬』を随筆社から刊行された版で読んだと言う。この随筆社版『蒼ざめたる馬』は、作者の経歴や底本の情報についての解説文が一切収録されていない点で、同時代に流通していた冬夏社版とは異なっている。つまり、平野は作品に関する情報を殆ど知らないまま『蒼ざめたる馬』に出会っている。1920 年 4 月から 1925 年 3 月にかけて旧制岐阜中学校の生徒であった平野は『蒼ざめたる馬』を十分に理解しないまま読んでいるが、この読書体験は彼の印象に残ったらしく、1930 年 4 月に東京大学文学部社会学科に入学してから「愛読」するほどこの作品を読み返したという」³⁹。

それでは平野は『蒼ざめたる馬』の何に惹かれて愛読したのだろうか。彼自身の言葉を引けば「テロリストの眼に映じた自然描写をいちばん愛読した」のである。『蒼ざめたる馬』から彼の愛読した箇所が幾つか引用されているが、例えばそれは以下のような文章である。

獄舎にある時私は時々、世界は美しいと想つた、そして外気や熱い太陽をあこがれた。しかし自由になるともうすぐ、私は再び倦怠を感じた。が、ある日が来た。その夕方私は孤りで歩いてゐた。天空はもう東の方が暗くなつて、星が現はれ初めてゐた。山々は薔薇色で青味がいつた霧で覆はれてゐた。夜

³⁷ 同上、151 頁。

³⁸ 同上、156 頁。

³⁹ 平野『「蒼ざめた馬」と私』、『蒼ざめた馬(晶文選書 4)』、203 頁。

風が下の方の河から吹いて来た。強烈な草の香があつた。蟋蟀は声高く鳴いてゐた。空気は香しくクリームのやうであつた。

この瞬間に突然私は、私は生きてゐるのだ、死は遠退いたのだ、私の前に生があるのだ、私は若くて強くて健康なのだ……と云ふことを識つたのであつた。⁴⁰

ほがらかな、そして愁はしげな日だ。河は太陽に輝いてゐる。私は、その広大ななめらかさ、深い静かな水の床を愛する。憂鬱な入日は海の中へ死んで、紫の天空が燃えてゐる。水の飛沫に悲哀がある。樅の梢は靡いてゐる。樹脂の匂ひがする。星が出て秋の夜が落ちた時に、私は私の最後の言葉を云はう。私の拳銃は私と共にある。⁴¹

『蒼ざめた馬』の語り手のジョージによって眺められた世界の光景は死の想念と切り離せない。夜の浮島で生死の間を彷徨する仲間や、アフリカの熱帯林の中で処刑される人間、嵐に吞まれる洋上の船などに語り手の眼差しは向かいながら、それらにおいて死を透視する。上に最初に引用したのは、かつてジョージが脱獄に成功した際、逃亡を続ける途上で自らの内に生氣の高ぶりを実感する場面である。いまひとつの引用文は『蒼ざめた馬』の最終部分に当たり、幾人もの仲間の死を経て、次なる暗殺の依頼を拒絶したジョージが目にする夕暮れ時の景色である。いずれにおいても語り手の眼に映る世界の光景は印象的に描写されており、一個人の生死と雄大な世界の姿との対比が鮮やかである。だが平野は『蒼ざめた馬』の自然描写そのものを単に愛読したというわけではない。彼自身の言を引いておこう。

断るまでもなく、私は自然描写そのものを愛読したわけではない。テロリストの「末期の眼」に映ずる自然描写のゆえに、私なりに愛読したまでである。無論、それは知事暗殺を指導し、みずからも愛人の夫を無慙に射殺する主人公の思考と行動の一反映としての自然描写にほかならないが、実は、当時の私には、この本の一主題ともいべき愛とテロリズム(殺人)の二律背反については、よくわかったといひがたく、しかし、そういうテーマの一反映としての自然描写だけは、私なりに愛読できたのである。いつてみれば、その当時の革命的ロマンティズムのゆえである。⁴²

青年時の平野を魅了去ったものは、『蒼ざめた馬』の世界がジョージという総督の暗殺と愛人エレナとの独占を同時に遂行する男の眼差し／語りを通して映写されている所である。このような平野と『蒼ざめた馬』

⁴⁰ ローブシン／青野季吉訳『蒼ざめた馬』随筆社、1924年、168-169頁。なお、引用にあたっては読者の用に供するため、旧字体を新字体に変更した。

⁴¹ 同上、218頁。

⁴² 平野『「蒼ざめた馬」と私』、204-205頁。

馬』との関係が、どこか大正期のテロリスト達の場合と重なって見えるのは恣意的な連想ではあるまい。かつて自分が『蒼ざめたる馬』の「末期の眼」に映る世界を愛読したと平野が書く時、彼の問題意識の内に花を見て「ああ、きれいだな。じつにきれいだ」と詠嘆する大正期のテロリストの影が差しているように見えるのだ。それに加えて、この作品からよく読み取られてきた「正義と倫理」をめぐる問題に対して、平野が確かな感觸を覚えないまま愛読したと言う事も見逃せない。「日本のテロリスト」との関連において言うのであれば、まさしく平野の読みにも思想も倫理もない。彼が『蒼ざめたる馬』を「テロリズムの叙事的散文詩」と言った事は、こうした自らの読みに裏打ちされていたのではないだろうか。

このように『蒼ざめたる馬』と私は、同作品と平野との関係が最も明確に表されている文章だが、一読して印象深いのは、『蒼ざめたる馬』と私という表題であるにもかかわらず、平野がこの文章中で一貫して『蒼ざめたる馬』という表記でこの作品と向き合っている事である。引用されている文章が全て青野訳である事からも明らかなように、彼にとって『蒼ざめたる馬』とは『蒼ざめたる馬』であり、その訳文を愛読した事は大正時代末から昭和初年にかけての左翼運動に関与した知識人達に共有されていた「革命的ロマンティズム」と切り離し得ないものであった。この語をめぐる問題については次節で触れる。

ところで平野が 1967 年にこのような読みを提示したのは何故だろうか。直ちに想起されるのは高橋和巳の存在である。彼もまた同時代に長大な評論「暗殺の哲学」(1967 年 9 月)や『漆黒の馬』の意味(1968 年 5 月)等でロープシンを評した一人である。平野の立場を相対化するためにも、ここでロープシンに対する高橋のアプローチについて少し触れておきたい。自己の体験を軸にして語りながら「この本の一主題ともいべき愛とテロリズム(殺人)の二律背反」について論を展開しない平野とは異なり、高橋は思想的なパースペクティブからその二律背反に肉薄する点に特徴がある。すなわち、「殺す権利についての手さぐり、はてしない逡巡、乗り越えようとする努力とその挫折」⁴³を当事者の内面において探るべく、『史記』の刺客列伝やドストエフスキヤカミュ、そしてサヴィンコフ／ロープシンに多くの事例を求めながら当の問題への接近を試みる事、これが高橋のアプローチである。こうした彼の批評は平野に対して自らの読みを反省させる役割を演じたようだ。前述したように、戦後の早い時期からロシアの革命運動におけるスパイやテロリズムの諸問題に触れてきた平野であるが、「私などとは比較ならぬ広い視野にたった『暗殺の哲学』という長大論文」を読んだ際、「私などのおぼつかない解説が、屋上屋を架する試みにすぎないことを知った。そこで私は青野季吉の訳文がどんなものだったかの一端を紹介するにとどめたのである」⁴⁴と回想している。つまり、高橋の評論に舌を巻きつつ、平野は自身の読みについて反省せざるを得なかったのである。彼が回想録的な語りを通してロープシンを愛読した自己について語ったのはそのためであろう。『蒼ざめたる馬』と私では「暗殺の哲学」では提示されていない、自己とロープシンとの出会いが前景に押し出されており、高橋との差異化が図られていると見ることが出来る。だが、ロープシンに対する平野の絶えざる関心のモチベーション

⁴³ 高橋和巳「暗殺の哲学」、『文藝』9 月号、1967 年、236 頁。

⁴⁴ 平野「『蒼ざめたる馬』と私」、205 頁。

を考えるにあたって、この一事をもって話が終わるわけではない。私達は『蒼ざめたる馬』の主人公の「末期の眼」に映った自然描写を愛読した理由について平野が「いってみれば、その当時の革命的ロマンティズムのゆえである」と言った事に、格別の注意を差し向ける必要がある。

3.3. 革命的ロマンティズム

「革命的ロマンティズム」は1960年代後半の平野の問題意識を理解する上で重要な用語の一つである。まず1960年代後半にかけて平野がこれまでの自らの人生についての回想を軸とした昭和文学史を幾つか執筆している事⁴⁵に目を向けよう。とりわけ『蒼ざめたる馬』解説の1年後に公表された「文学運動の流れのなかから」は、革命的ロマンティズムが再び言及されている点で注目に値する。この回想記風の昭和文学史において平野が繰り返し問うているのは、昭和初年代の左翼系作家の文学運動において共有されていた心性——革命的ロマンティズム⁴⁶——を現代の文脈においてどのように位置付けるかという事である。

ポイントは昭和初年代のあの革命的ロマンティズムという文学上の問題を、今日私どもはどう受けとめ、どう再評価すべきか、という点にある。パセティックにまで観念的な、ときに書いたのも、革命的ロマンティズムの一属性をゆびさしたつもりである。革命的ロマンティズムのプラス・マイナスにこそ、文学運動のリアリティは存したのである。⁴⁷

このような革命的ロマンティズムへの問いと平野のロープシン観は切り離し得ない。彼の批評において、革命的ロマンティズムは1920-30年代の政治状況と1960-70年代のそれとを接続させる媒介的な語であり、この語を通して戦前の左翼運動と戦後の大学紛争における共通の心性が導き出されている。平野がロープシンを再想起するのはまさにこの連関においてである。

「文学運動の流れのなかから」において幾度か言及されているように、平野は青年時の自己の政治的資質を懐疑的に見ていた。官憲による共産党員の斉検挙と転向が起こる昭和初年代、目まぐるしく変化する状況の中で「私なりの無血の転向」を迎えた平野は、一方で「悪いのはオレのせいじゃないぞ」と思い、他方では「やはり虫かい」と思いながら自己の資質にかなった仕事かしたいという内心の希い⁴⁸を抑える事が出来なかった。このようにかつての自己について語った後、「柔弱な文学青年的気質をすてきれない私のよう

⁴⁵ 例えば、『わが戦後文学史』講談社、1969年；『文学運動の流れのなかから』筑摩書房、1969年；『文学・昭和十年前後』文芸春秋、1972年など。

⁴⁶ 平野の言う革命的ロマンティズムについて、中山は「プロレタリアートの解放という歴史的使命を、知識人の革命的自己変革によって主導するという、当時の青年たちのラディカリズム」と説明している。中山『平野謙と「戦後」批評』、427頁。

⁴⁷ 平野「文学運動の流れのなかから」、『文学運動の流れのなかから』筑摩書房、1979年、48頁。

⁴⁸ 同上、30-31頁。

なものは、もともと左翼運動に従事するガラではなかった、といえるかもしれない」⁴⁹と自らの政治的資質を評する。けれども平野が執拗に問題化しようとするのは「私のような臆病な青年」と左翼運動を取り結ばせた時代の心性に他ならない。

しかし、私のことはしばらく措き、太宰治や高見順のようなどうみても左翼運動に適していると思えない個性が、一時期運動に身を投じたという事実、当時の革命運動全体の観念性のまぎれもないプラス・マイナスが存したのである。[……]当時の革命運動がバセティックにまで観念的だったればこそ、私のような臆病な青年も、成敗を顧みる違もなく、そこに惹きつけられたという側面があった。⁵⁰

このような平野の文章を読む時、私達は「日本のテロリスト」を想起しないわけにはいかない。日本の革命運動が「情緒的メンタリティ」を切断出来ず、常に情緒で思想や論理を中和し融解してきたのだという 1950 年代の平野の激しい批判が、ここではアンビバレンツな眼差しの入り混じったトーンに変化しているからである。大正期のテロリストを含む日本の革命運動を革命的ロマンティズムが貫いているとすれば、それと関係を結んだ平野も昭和初年代の自己を問い直す作業は避けられないだろう。青野訥『蒼ざめた馬』の「末期の眼」を愛読した自己の姿は、この問いの中で確かな感触をもって見出されるのである。彼が「いってみれば、その当時の革命的ロマンティズムのゆえである」と述べた事は、こういった事情に因る。

しかしながら、事は単に平野が『蒼ざめた馬』への言及を通して革命的ロマンティズム批判を行ったという話に留まるのではない。私達は、彼が 1960-70 年代の大学紛争の渦中に馴染み深いあの心性を感触していた事に注目しないといけない。平野も言うように、「ただ私一個としては、今日の大学紛争にみられるラディカリズムも、その根源にさかのぼれば昭和初年代の革命的ロマンティズムにまでさかのぼることができるように思う」⁵¹からである。1960-70 年代の政治状況の渦中に 1920-30 年代の革命的ロマンティズムの息吹を平野が察知したのは無理も無い。私達なりに整理すれば、日本共産党の組織的運動が官憲からの弾圧と転向によって行き詰まり、遂にはテロやスパイの問題を生み落とした 1920-30 年代に『蒼ざめた馬』を愛読した平野が、組織的な闘争形態を特徴とした安保闘争が運動の後退により、党派間の抗争やテロの問題を生起させた 1960-70 年代を見据える時、彼は既視感と違和感に駆り立てられて、革命的ロマンティズムを、そしてロープシンとの出会いを批評として問題化したのである。この地点において、批評は同時代への一つの抵抗となり得るのかもしれない。実際に「文学運動の流れのなかから」の冒頭において、平野はこの「文学的回想」を執筆した動機について次のように語っている。

⁴⁹ 同上、31 頁。

⁵⁰ 同上、31 頁。

⁵¹ 同上、49 頁。

今日の文学運動が組織的に新日本文学会と日本民主主義文学同盟とにひきさかれ、まっぴたつにひきさかれることによってともども閉鎖的となり、次第に文学的エネルギーを喪失してゆくかみえる現状に対して、もしも私の文学的回想がささやかなプロテストになり得るならば、望外の幸せというものである。吉野源三郎は「年長の友人だけしか言えない助言」ということを書いているが、そういう助言の容れられる余地が残っているほど、私は今日の状況を楽観的にはみていない。そんな私でも「内ゲバ」とか「内内ゲバ」などという言葉で大した抵抗もなくつかう昨今の精神的デカダンスに対して、私の貧しい文学的回想が多少のプロテストにならないものかと希ってはいる —— ⁵²

この時期の平野が眼前の状況に対して些か悲観的な眼差しを向けていた事が窺える一節である。平野の引用文を補足しておけば、1965年に日本共産党との関係を巡って新日本文学会から日本民主主義文学同盟が結成された際、彼はこの事態の中に「文学的エネルギー」の喪失を見ていた。そこへ大学紛争における内紛やテロといった「精神的デカダンス」が重なる事によって、平野は「私の貧しい文学的回想」を自分なりの一つの抵抗として差し出す決意をしたという経緯なのであろう。『蒼ざめた馬』はこの問題意識に沿って、ここで再想起される。昭和初年代の左翼運動に蔓延していたあの心性を、戦後の大学紛争の文脈上に位置付けながらそのプラス・マイナスを測定する時、彼はどうしても『蒼ざめた馬』を批評する必要があったのである。ロープシンとの出会いを単なる一時的な感動や興奮によって閉じるのではなく、そのパトスを分かち合う2つの時代の心性を問い直す事 —— そのような志向を、私達は平野のロープシン観から読み取る事が出来るであろう。

4. むすびに

私達は本論文において、日本におけるナロードニキ受容とロープシン『蒼ざめた馬』受容の各特徴を示し、次いでそれらがいづれも近代日本において刹那的な興奮と感動しか引き起こさず、一つの精神的出会いとして知識人に受容された事が稀であった事を確認した。そして例外的な受容として、ロープシンとの出会いの意味を様々な文脈上で思考し続けた平野謙に焦点を絞り込み、その連続する関心のモチベーションを彼の諸批評において探る事を試みた。その結果、昭和初年代における『蒼ざめた馬』との出会いが平野のロープシン観の基底を成している事が明るみに出た。もちろん、私達は平野の批評活動の「淵源」にはロープシンが潜んでいると主張したいのではない。平野自身も幾度か述べているように、彼が政治運動におけるテロリズムやスパイの諸問題と向き合うようになった発端は、戦前の日本共産党に関連した一連の事件から受けたショックに帰する。1972年に寄せた大佛の『詩人』と『地霊』の解説において、高橋の「暗殺の哲学」が提示する理論的なパースペクティブに驚嘆しながら、「しかし」と彼は自らの経験を差し出している。

⁵² 同上、9頁。

しかし、私も私なりに革命運動とテロリズムとの関係、革命運動とスパイとの関係については些少の関心をはらってきた、といえるだろう。というのは、戦後の伊藤律問題や戦中のゾルゲ・尾崎秀実問題よりもうすこし古く、昭和九年一月、当時の日刊紙にことごとしく報道されたいわゆるリンチ共産党事件に、私はしたたかな衝撃をうけたからである。そのリンチ事件の最高責任者ともいべき宮本顕治は当時私の最も敬愛する文芸評論家のひとりだったし、殺害された小畑達夫は二十日間ほど同居したことのあつた人物だった。小心なインテリにすぎぬ私が、この報道から大きなショックをうけたのも、けだし当然だろう。以来、革命運動における赤色テロとスパイという問題に、私はおのずと注目せざるを得なかったのである。戦後になって、昭和七年のいわゆる大森ギャング事件とよばれた銀行襲撃を中心とするスパイ問題に関心するようになったのも、そういう私一個の原体験みたいなものに基づいている。私が比較的早い時期に『詩人』『地霊』を愛読したのも、またそのせいである。⁵³ [強調は田村]

ここで平野が説明している一連の事件、或いは彼自身が味わった「全人間的なにかいゝ幻滅」⁵⁴ については、既に多くの研究者による詳細な論考の蓄積があり、私達が改めて論じる余地は無い。但し、平野の言う「私一個の原体験みたいなもの」にロープシンの影が差している事を指摘するだけで十分である。彼の『蒼ざめた馬』受容の変遷をいま一度整理しておけば、1950年代の批評では、日本の左翼運動における組織面の脆弱性を突く目的から『蒼ざめた馬』に部分的な言及がなされている程度であり、この時点では昭和初年代のロープシンとの出会いを平野はまだ批評として扱っていない。これが二度目のロープシン・ブームを迎えた際、『蒼ざめた馬』を『愛読』した事を前景に押し出しながら、そのようなパトスの受容と相関している昭和初年代の左翼運動の急進的心性を再検討するという批評へと変化している。この変化の動因について、私達は革命的ロマンティズムという語を手掛かりとしながら、平野が1920-30年代と1960-70年代の各政治状況の推移に既視感と違和感を覚えたからではないかと考える。ロープシンとの出会いを、刹那的な愛読の域に留まらず、自らの読みと幾分は結び結んだ同時代の心性を意識の俎上に載せながら、その意味を問い続けた稀有な知識人として、平野謙を見做す事が出来るだろう。そのロープシン観は、1960-70年代日本の精神史の一端を照射するものとしても、現代の私達に示唆を与えるのではないかと考えるものである。

(たむら ふとし)

⁵³ 平野「解説(『詩人』『地霊])」、『大佛次郎ノンフィクション全集』2巻、409頁。

⁵⁴ 磯田光一『戦後批評家論』河出書房新社、1969年、66頁。

Восприятие повести «Конь бледный» Б.В. Савинкова (В. Ропшина) в Японии

ТАМУРА Футоси

Целью данной работы является анализ восприятия в Японии повести «Конь бледный», написанной Борисом Викторовичем Савинковым (так же известного под псевдонимом В. Ропшин, 1879-1925 гг.) в 1909 году. Для этого мы проанализируем четыре литературно-критические статьи, автором которых является один из важнейших литературных критиков Японии XX века - Хирано Кэн (1907-1978): «Человек в организации» (*Сосики но нака но нингэн*, 1956 г.), «Террористы в Японии» (*Нихон но терорисутто*, 1958 г.), «Мы с “Конем бледным”» (*“Аодзамэта ума” то ватаси*, 1967 г.), и «Из течения литературного движения» (*Бунгаку ундо но нагарэ но нака кара*, 1969 г.). При исследовании мы особенно будем обращать внимание на то, как Хирано воспринимал «Конь бледный» Савинкова.

В результате анализа мы выявили следующее: во-первых, в 1950 гг. Хирано указывал на слабость организации как таковой в левом движении в современной ему Японии, основываясь на повестях Осараги Дзиро (1897-1973) «Поэт» (*Сидзин*, 1933 г.) и «Дух земли» (*Тирэи*, 1946 г.), которые, в свою очередь, основаны на деятельности Боевой организации эсеров. Во-вторых, в 1960 гг. Хирано в своей статье вспоминал встречу с Савинковым. По признанию самого Хирано, из-за радикальной тенденции “революционного романтизма”, идеи которого в Японии 1930 гг. разделялись среди левых интеллектуалов, в произведении «Конь бледный» ему полюбилось изображение мира через призму глаз умирающего. В-третьих, поскольку Хирано, обращая внимание на студенческое движение 1968 года, нашел в нем ту самую радикальную тенденцию, он критически пересматривал вопросы, связанные с “революционным романтизмом”. Исходя из вышеизложенного, мы можем утверждать, что Хирано является тем особенным интеллектуалом, который продолжал читать «Конь бледный» Савинкова (Ропшина) и размышлять о нем в 1930-60 гг. в Японии.